

## 牛込の町の名前はおもしろい

中学生の途中から成人後ぐらいまでの時期を牛込で過ごした。昭和 30 年代の牛込は、巨大なビルやマンションなど建っていなかったし、都電が走り、街角には様々な小売店が建ち並び、近所だけで生活が成り立つような町だった。

牛込という地名の歴史を遡ると、701 年大宝律令に辿り着く。律令により武蔵国に牛牧（ぎゅうまき）が設けられて、この地に乳牛院という飼育舎が作られたのが始まりらしい。かたや、馬牧の名残の地名が馬込・駒込だそう。

私が住んでいた町は「箆笥町（たんすまち）」という何か意味を考えさせられるような町名で、興味を感じた。この時代には神田にも芝にも麻布にもそんな町名が沢山あり、行ってみたいくなるような町名はどこにでもあったが、今ではコンクリートの密林に沈んでしまい町の名も変わってしまった所が多い。

この町を出てから 50 年の時が流れてしまいはしたが、この間に何度か牛込の町を散歩してみる機会に恵まれた。マンションをはじめとする大きなビルに埋め尽くされてきたが、まだ昔の町名が数多く残されていて歩いていると嬉しくなってくる。

現存する新宿区の町の名前の中で、「牛込」と区分しても良さそうな町を並べて、そこに自分の記憶を重ね合わせてみた。（以下 町名は 50 音順）

<赤城下町> 飯田橋駅から神楽坂を上り詰めて、山の反対側に下ると赤城神社がある。神社から西に伸びる参道に沿って赤城下町がある。路地裏に印刷工場や製本工場が沢山あり、父に頼まれてゲラ刷りの運搬などをしたことがある。

<赤城元町> 文字通り赤城神社の根元にあるのが赤城元町。1300 年代に群馬県赤城山麓の大胡の豪族大胡彦太郎重治が牛込に移住した時に故郷の神社の分霊を祀ったのが始まりで、江戸時代には牛込の総鎮守と崇めて江戸三社のひとつに数えられた。「赤城神社のお祭りだから・・・」と歩いて見に行った記憶がある。

<揚場町（あげばちょう）> 水運の町であったことを示す町の名前で、大事に残していただきたい。堀割から荷揚げをした所であることが文字を見ただけでわかる。近くに神楽河岸という町名も残っている。

<市谷加賀町（いちがやかがちょう）> 加賀藩前田家の屋敷があった。今では殆どの面積を大日本印刷とその関連会社が占めているようだ。大日本印刷の裏側には、静かな佇まいの家が目立った。

<市谷甲良町（こうらちょう）> 江戸時代に大棟梁だった甲良氏の屋敷があったことが地名の由来と言われている。加賀町の北側にあり、現在の久保通りの南側に位置している。

<市谷砂土原町（さどはらちょう）> 外堀を背にして牛込の山に登っていく途中にある。江戸時代に本多佐渡守の別邸があり佐渡原と呼ばれていた。後にこの屋敷がなくなった後で埋立用の土砂採取場所になったことから「砂土取り場」と言われた。牛込北町から市ヶ谷駅へ歩く時を通る裏道で、草月流の勅使河原蒼風の豪邸があった。

<市谷左内町（さないちょう）> 市ヶ谷駅前から外堀を渡るとすぐ目の前にある急な登り坂が左内坂。この地を開いた名主の島田左内の名が地名になっている。駿台予備校・江上トミ料理学院があり、朝晩は狭い坂道が混雑したものだ。

<市谷鷹匠町（たかじょうまち）> 左内坂を登り切った北側にあり、現在では大日本印刷とその社員寮などで占められている。江戸時代に鷹匠組の屋敷があった所で、その名残が立派な家が建っていたが、経済成長のカーブに合わせて大日本印刷の町に変わっていった。

<市谷台町> 曙橋から東大久保の抜弁天へ向かう途中にあり、牛込と言っても四谷が近そうな所。その昔市ヶ谷三軒屋敷・市ヶ谷鍋釣町・市ヶ谷谷町が統合して市ヶ谷谷町となったが、その 50 年後に一部が切り出されて市谷台町という名前になった。地形的に「台町」と「谷町」とは相容れないこともあったとか。

<市谷田町> 江戸時代には武家・町人の居住地だった。田町と言う名から農地を想像するが詳細は不明。

市ヶ谷駅を出た中野行のバスが外堀を離れて牛込の山に登っていく場所で、エンジン音が変わる所だった。

＜市谷長延寺町（ちょうえんじまち）＞ 左内坂の中腹あたりで砂土原町との間に挟まれたわずかな空間が市谷長延寺町。その昔、長延寺という寺があったことでこの地名ができたとのことだが、寺は明治時代に杉並区に移転してしまい地名だけが残った。

＜市谷仲之町（なかのちょう）＞ 市ヶ谷本村町にあった尾張徳川家の上屋敷と河田町にあった屋敷の中間にある町として「仲ノ町」という町名ができたのが始まり。

＜市谷八幡町（はちまんちょう）＞ 太田道灌が江戸築城の時に、江戸城西方の守護神として鎌倉鶴岡八幡宮の分霊を祀り、市ヶ谷御門の中に亀岡八幡宮を造った。寛永年間に外濠の完成を機に現在の場所に移転し市ヶ谷亀岡八幡宮と改名、後に市ヶ谷八幡宮と呼ばれるようになった。外濠を挟んで市ヶ谷駅の対岸の急傾斜地の上であり、登山のトレーニングの一環として深夜の石段昇降に頻繁に利用させていただいた。

＜市谷船河原町（ふながわらまち）＞ 飯田橋の東京理科大学の西側にあり、外濠を挟んで東京通信病院が見える。揚場町と同じように水運の名残の地名ではないかと思うが詳細は不明。

＜市谷本村町（ほんむらちょう）＞ 自衛隊の市ヶ谷駐屯地があり、1970年に起きた作家三島由紀夫による決起・割腹事件を思い出す印象の良くない町。明治7年に陸軍士官学校が出来たのが始まりで、ある時は参謀本部、又ある時は極東軍事裁判の法廷にと戦争の歴史を刻んできた町。昔は市ヶ谷村の本村だったことを意味する地名と聞いたことがある。

＜市谷薬王寺町（やくおうじまち）＞ 薬王寺という寺があり門前町を形成していたらしいが、明治維新の時に廃寺となり、町の名前だけが残った。

＜市谷柳町（やなぎちょう）＞ 昔から牛込柳町と言われたり市ヶ谷柳町と言われたりで落ち着きがないのは柳町だけではないが、未だに地下鉄の駅の名前は「牛込柳町」で町の名前は「市谷柳町」。明暦の大火以前は寺社領や武家地だったが、大火の被災者が数多く移住して町人地が形成されたという。大きな窪地で湿地が多く柳が生えていたのが地名の由来ではないかと言われている。

＜市谷山伏町＞ 昔このあたりに山伏が多数居住していたことから地名が誕生したらしい。町のシンボリック存在は明治38年開校の市ヶ谷小学校。創設時のレンガの塀が今でも残っている風情ある学校。

＜岩戸町＞ 大久保通りの神楽坂上交差点の新宿側のわずかな面積が岩戸町。寛政10年に「神楽坂の上なので、神楽にちなんでこの地の名を岩戸としたい」と町奉行に願い出て認められて町名になったとか。

＜榎町＞ 地下鉄東西線の神楽坂駅と早稲田駅の間点あたりが榎町。根が7~8畳もある榎木の太木があることでこの地名が付いたそうだが、寛永年間にはもう木は存在せず地名だけが生きながらえたとのこと。現在は町の殆どの面積は大日本印刷の榎町工場で占めている。

＜改代町（かいたいちょう）＞ 地下鉄有楽町線の江戸川橋駅の南方にある。その昔湿地だったことから芥を埋めて段階的に宅地化したので「牛込築地替代町」と表記されたことが始まりで、後にこれが転じて今の町名になった。笹笠町に住んでいた頃に台風で江戸川橋周辺が浸水することがしばしばあり、この町の名前を知った。

＜神楽河岸（かぐらがし）＞ 現在の飯田橋駅神楽坂口の前で、千代田区との境にある。昔は川からの荷の揚場になっていた。近くに揚場町（前述）があるが、どちらも岸辺の小さな町である。

＜神楽坂＞ 地名の由来は「祭礼に際して神輿が重くてこの坂を上がれなかったが、神楽を奏したら容易に上がることが出来たことから坂の名が付いた」とのことだが、どの神社の祭礼なのか諸説あるようで定かではないらしい。坂の中程にある毘沙門さん（善国寺）の祭りは、この界限では大変大きなものだった。毘沙門さんの裏手には「粋な黒塀・見越しの松」が並び、芸妓の歩く姿がしばしば見られた。ロッキード事件の頃に、黒い高級乗用車が永田町や赤坂との間を往復していたという話を聞いたことがあるが、真偽はわからない。

＜片町＞ 曙橋（合羽坂といった方が馴染みがある）の南に位置し牛込と四谷の境にある。牛込片町と言われたり四谷片町と言われたりの不安定な存在だった。隣町の本村は道の両側に町屋が並んでいたが、ここは片側だけだったので片町と名が付いた。

＜河田町＞ この辺り一帯は窪地になっていて「川田久保」と呼ばれていたのが地名の起源らしい。確かに

河田町から女子医大病院の横を抜けて曙橋までの道と、本村町の自衛隊あたりまでの道を歩いて見ると、そんな感じもする。地下鉄大江戸線に「若松河田」という混血の駅が出来てしまったが、都電 13 番の停留所はわかりやすくなっていた。車掌のアナウンスは、「若松町 国立第一病院前」、「河田町 女子医大前」。

＜喜久井町（きくいちょう）＞ 若松町から国立第一病院（現在は国立国際医療センター）への道を正面に見て、右に下る坂道が夏目坂。坂を下っていくと喜久井町がある。この地の旧家夏目小兵衛（夏目漱石の生家）の家紋が「井桁に菊」であることから町名が付いたそうで、その前は馬場下横町と言っていた。

＜北町＞ その昔は牛込北御徒町と呼ばれていたが、明治に入って牛込北町と改名された。牛込の多くの町が「牛込 XX 町」と言われたり「市ヶ谷 XX 町」と言われたりしてきたが、不思議なことに牛込北町・牛込中町・牛込南町だけは市ヶ谷北町・中町・南町とは言わなかった。（町の成立については中町の項に詳述）

＜北山伏町＞ 江戸時代にあった牛込山伏町（前述：市谷山伏町）の他に明治 5 年に北山伏町と南山伏町が誕生した。現在の地図を見ると、「南山伏町は北山伏町の南」にあるが「北山伏町は市谷山伏町の東」にある。経緯はわからないが、不思議。

＜細工町（さいくまち）＞ 外濠の市谷田町から砂土原町の坂を登って行き、牛込北町の交差点の西側にあるのが細工町。その手前に納戸町・払方町・鷹匠町などもあり、地図を見ながら歩くと目を奪われる所だ。元は天龍寺という寺の境内だったが御用地になり、後に火事で焼けたため約一万坪の面積を四谷に替地となった。その跡地が御細工同心拝領の町屋となったことからこの町名が生まれた。

＜下宮比町（しもみやびちょう）＞ 飯田橋五叉路の北東側角地にあり、江戸時代には武家地だったこの地の旗本屋敷に宮比神社があったことから明治 2 年に宮比町が誕生した。宮比神社には天宇受売命が祀られており、明治 40 年に筑土八幡の境内に遷座された。また町は明治 5 年に上宮比町と下宮比町に分かれたが、現在は下宮比町しか残っていない。

＜白銀町（しろがねちょう）＞ 赤城神社の背中にあたり筑土八幡との間に位置する静かな住宅地という印象の一角だった。徳川家康が江戸城に入った頃、田安門周辺の民家を牛込（今の白銀町と寺町）に移した。町名の由来は江戸時代末期の文献でも不詳となっているが、「白金長者」にあやかって早く裕福になれるようにとの願いを持って付けられたと言う説が有力らしい。

＜新小川町＞ 新 XX 町という極めて現代的な町名ではあるが、江戸時代に神田小川町に住む武士たちを移してできた武家町で、それが地名の由来となった。飯田橋から高田馬場に向かう 15 番の都電に乗るとしばらくで左に大きくカーブする所が大曲交差点、その左側が新小川町。対向の線路を走る 39 番は面影橋から来て小石川に登り伝通院を通過して厩橋に行く。都電が行き交う大曲の交差点は町の立体感が感じられて見ても飽きることはなかった。

＜水道町＞ 文京区との境、西五軒町の西側にある。水道町の西側に北から文京区関口一丁目と神田川を跨いで複雑に食い込んでいて、このあたりは不思議な区境になっている。文京区には水道一丁目・二丁目という町がある。いずれにせよ水道の歴史との関わり合いがある所に違いない。

＜住吉町＞ 曙橋から女子医大の方に入ってく道筋（フジテレビ通りと言われたこともあった）にある。昔は市ヶ谷谷町と言ったが、谷という文字が重なって誤記・誤読されやすいことから、昭和 27 年に町名を改称。「住んで良し」の町ということで「住吉町」と名付けた。全国各地にある「住吉町」には住吉神社が関係している所が多いが、ここでは例外。

＜高田馬場＞ 江戸時代に弓馬の調練場として使われていた広大な野原。元は牛込区にあった高田町・戸山と淀橋区の戸塚町の一部が昭和 50 年の住居表示変更で「西早稻田」となり、淀橋区の諏訪町・戸塚町などが「高田馬場」となった。つまり現時点での高田馬場は旧牛込領域ではなく旧淀橋領域になる。

＜箆笥町＞ 江戸時代には牛込御箆笥町と言われ、御具足奉行組同心・御弓矢鎗奉行組が拝領した町屋だった。縁があってこの町に住み、この名前が気に入っていたが「衣装を入れる箆笥を作る職人が住んでいたのでは・・・」と勝手に想像していたのは誤りで、実は「御箆笥」とは武器の総称を示す物だった。四谷にあった箆笥町は鉄砲玉薬奉行、下谷の箆笥町は御鉄砲御箆笥奉行の拝領屋敷があったとのこと。また、麻布の箆笥町は牛込とほぼ同じ内容だったようだ。神楽坂寄りの町境には袖摺坂という味のある名の坂があり、その名の通りの細い坂道だった。坂道の向こう側は牛込肴町だったそうだが、地元の人には昭和 30 年代にも「さ

かなまち」と言っていたように覚えている。

＜築地町＞ 築地とは、今風に言えば埋め立て地のこと。沼地だったところを埋め立てして町屋を作ったことからこの地名になった。元は済松寺の開祖である祖心尼が拝領した土地で、祖心町と呼ばれていた。

＜津久戸町＞ 江戸時代には津久戸明神の前にあったことから津久戸前町と呼ばれていた。これも地名の由来としては「築土（つくど）」から来ているとみて良いだろう。

＜筑土八幡町＞ 都電 13 番の万世橋行が神楽坂を出ると下り坂を緩やかにカーブして筑土八幡前。このあたりは御殿山とも言われ、太田道灌の別館の地でもあった。三代将軍家光の時代には鷹狩りの仮御殿にも使われた。筑土八幡は西暦 800 年代に創建。

＜天神町＞ 筆筈町から旺文社・新潮社の前を通過して江戸川橋方面へ歩いて行くと神楽坂の頂上から江戸川橋側へ下るようになるところに大きな交差点があり「天神町」と書いてあった。江戸時代にこのあたりを拝領していた大橋龍慶の屋敷内に天神社があったことからこの地名が付いた。天神社は寛永年間に高田に移されて高田天満宮となった。

＜富久町＞ 現在は富久町だが、1983 年迄は市谷富久町（富の字に注意）だった。市ヶ谷とは言っても殆ど四谷のような所だ。地名の由来は定かではないが、どこにでもある「幾久しく富があるように」という縁起担ぎの地名と思われる。

＜戸山＞ 鎌倉時代に和田戸何某という武士の屋敷があり、源頼朝がこの地に来たときに軍勢を休めた。江戸時代には和田村・戸山村が存在。後に尾張藩が広大な屋敷を建て「戸山荘」と呼ばれた。明治時代には軍用地として活躍し、戦後は住宅団地の先駆け「戸山ハイツ」ができた。様々な歴史を持つ町。

＜中里町＞ 兵庫町（現在の神楽坂 5 丁目）と早稲田村の中間にあったことで付いた地名ということらしいが、真偽は不明。現在は赤城下町と山吹町の間にあり、印刷関係の町工場がある小さな町という印象だった。

＜中町＞ 元の名は牛込中町。大久保通りから入ると北町・中町・南町・納戸町ときれいな区画の町が並んでいる。江戸時代には幕府御徒組屋敷があり北中南に分かれていた。御徒組とは、徒歩で戦う下級武士のことを言った。山手線の御徒町も同じで、下谷御徒町と言っていたらしい。

＜納戸町（なんどまち）＞ 牛込北町から新橋行のバスに乗ると、次の停留所が納戸町。住んでいる我々は「なんどちょう」と言っていた。江戸時代には御納戸同心が拝領した町屋がここにあった。筆筈町に住んだ頃に、近くに変った町名があることに最初に気がついたのがこの町。

＜西五軒町＞ 飯田橋から都電 15 番に乗って高田馬場方面へ向かうと、江戸川に沿って北北西に進み、大曲で左にカーブして西北西に向きを変える。向きを変えた都電の左側の車窓に並ぶのが東五軒町と西五軒町。下級武士の宅地は同じ組がまとまって与えられたが、元禄時代にこの地は根本角兵衛ほか四名（計五名）が拝領を受け、五軒の屋敷ができ後に町作りも許され五軒町が生まれた。その後、明治 5 年に町が二つに割れて東五軒町と西五軒町となった。

＜二十騎町＞ 「にじゅっきまち」と言う人が多いが、江戸言葉で「にじっきまち」が正しいと思われる。江戸時代の軍制のひとつとして「御先手（さきて）組」というものが存在した。弓・鉄砲などを持った足軽による先鋒隊で、一組十人で構成されていた。御先手組の与力二組の屋敷があったことから二十騎組と呼ばれ、やがて地名としても使われるようになった。山伏町の南側、大久保通りから一本南側にあり、（現在の牛込警察署の裏側）市谷加賀町の北側にあり静かな住宅地だったような記憶がある。

＜西早稲田＞ 昔の区分で言えば牛込と淀橋の境目に位置し、牛込の地名として取り扱うのには難があるかもしれない。早稲田大学の西側だから西早稲田と名が付いたと思うが、戸塚町と言っていたような気がする。

＜馬場下町＞ 高田馬場の東側にあり、牛込の総鎮守である穴八幡前の八幡坂の下にあたることからこの名が付いた。道を挟んで西側は西早稲田になる。

＜払方町＞ 御納戸同心払方の者が拝領した町屋敷があったことから、この名が付いた。納戸町の東側に位置し南町の南側になる。払方は、大名や旗本に下賜される報酬の出納の仕事をしていた。

＜原町＞ 下戸塚村の柵原と言われる原地に百姓家が出来、やがて寺社奉行支配の町屋が出来た。原に町屋を作ったことから原町というようになった。牛込柳町の谷底から這い上がるように出てくる都電 13 番が坂を登り切ってほっと一息付くところが原町で、若松町まで平坦な道が続き運転手が腰の手ぬぐいで汗をぬぐ

うのがこのあたりだった。

＜東榎町＞ 榎町の東側に明治5年にできた猫の額ほどの町。(由来については榎町の項を参照)

＜東五軒町＞ 西五軒町の項に詳述。

＜袋町＞ 牛込北町(御徒組)と神楽坂(肴町)とに挟まれた場所で、御徒組の屋敷にぶつかり袋小路になっていることからこの名が付いた。まさにその名の通り狭い小さな町で、その後も町域を変えることなく現在に至っているとのこと。(御徒組については北町・中町の項に詳述)

この町の歴史はこれだけは終わらない。遡ると、上州の豪族大胡重行が上杉から北条に鞍替えした時に北条氏からこの地を拝領し、1500年代に大胡勝行が築城。(大胡氏については赤城元町の項に詳述)この地の地名をとって牛込城と名付け、自らも牛込勝行と名乗るようになった。北条氏が滅亡して徳川の時代に入るとこの城は壊されて、遺構も残っていないとのこと。小さな袋町ではあるが、牛込の歴史が詰まっている。

＜弁天町＞ 牛込柳町の交差点から外苑東通りを北上すると弁天町がある。牛込郵便局でアルバイトをしている時に、この町から来ている同年齢の男と知り合いになったことで、この町の名を知った。宗参寺門前に百姓4名が住み着いたのがきっかけとなり集落が形成され、近くにある牛込勝行の子勝重が父の為に建てた南蔵院の弁天堂にちなみ、1745年(延享5年)に牛込弁財天町という町名ができた。

＜南榎町＞ 早稲田通りから大久保通りの山伏町の北側までのかなり広い面積の町で、明治5年にできた。かつて泉鏡花が住んでいたという町。

＜南町＞ 中町の項に詳述。

＜南山伏町＞ 明治5年にできた町。(北山伏町の項に詳述)

＜山吹町＞ 「ななへやへ はなはさけどもやまぶきの みのひとつだになきぞかなしき」

太田道灌が鷹狩りに際しにわか雨に遭ったという、落語にもなった逸話がこの町の由来。「山吹の里」の逸話の地についてはいくつかの説があり、真説は定かではないらしいが……。父が関係している印刷関係の会社があり荷物運搬を引き受けたり、その会社でアルバイトをしたりで縁のある町だった。

＜矢来町＞ 小浜藩の上屋敷・下屋敷・武家屋敷があったが、川越藩主酒井忠勝が拝領した。忠勝は徳川家光の信が厚く、家光の鷹狩り等の時にこの屋敷が使われていた。

「矢来」は京都の町屋などでよく見かける、家の軒下を保護する竹や木の仮囲いのようなもの。明暦の大火の時、家光がこの屋敷に避難した際に家来たちが抜き身の槍を並べて守ったが、この光景が矢来のようなことからこの名が生まれたとの言い伝えがある。

牛込北町の交差点から北へ緩やかな坂を登っていくと矢来町で、広大な敷地の中に建つ興銀の社宅が団地のように並んでいた。そしてさらに北へ進むと新潮社があり、その近くの銭湯へよく通った。

＜横寺町＞ 町の名前の由来が想像できてわかりやすい。古くは農地だったらしいが、後に町屋になり、牛込通寺町と言われるようになった。そして「寺町横町」が転じて「横寺町」となった。「よこでらちょう」と言っているが、その成り立ちから考えると恐らく「よこ・てらまち」だったのではないかと思う。今でも小さな寺がいくつも並んでいる静かな路地だ。

＜余丁町(よちょうまち)＞ 江戸時代には大久保村の中で、幕府の旗組屋敷があり、横町が四本あったことから「大久保四丁町」と言われた。明治5年に大久保前町を併せて新しい町ができた折り、縁起の悪い「四」という文字を「余」に改めて余丁町が誕生した。今でも東京女子医大病院の西側に整然と区画された四区画が見られるが、これが発足当時の名残と思われる。

＜若松町＞ 正月に門松に使う若松を切り出して江戸城に納めていたことからこの地名となった。

＜若宮町＞ 東京理科大学の後方、山の中腹にある。この地の鎮守である若宮八幡宮が地名の由来となっている。この神社は、源頼朝が奥州藤原氏との合戦に勝った時に建立された。

＜早稲田鶴巻町＞ 江戸時代には小石川村で田の中に鶴を放し飼いにしていたので、この地にも鶴が飛来し、鶴の番人を置いたりしていたことから地名となったと考えられている。だとすると、おそらく原名は「鶴牧(つるまき)」だったのではないかと思う。

＜早稲田南町＞ 早稲田の南、近代または現代になってから誕生した地名と思われる。

＜早稲田町＞ 牛込村の一部だったが、後に早稲田村となった。おそらく早生の稲を作った田があったこと

によると思われる。この地に水田が広がる光景を想像してみただけでも面白い。

◆しめくくり

旧牛込地区と考えられる地名を挙げて、調べたり思い出したりしたことを書き連ねてみた。すると大きく浮かび上がってくる物が見えてきた。江戸時代以前は野であり原であり、田も畑も山もあった所で、牛を飼う牧も広がっていた。

江戸時代に入ると徳川幕府の政策としての町作りが始まり、幕府のために働く人が住む町が城内外に整えられた。そうしてできた外濠の外の町、つまり今風に言えば「中・下級公務員の宿舎を郊外に作った」ということのようなのだ。

今まで以上に、牛込の町の名に興味を感じるようになった。

以上

<付録資料> 牛込地区概略地図（町名入り）

